



真宗大谷派 東岳山  
安泉寺

愛知県愛西市三和町中ノ割173-1  
TEL: 0567(28)0001  
Mail: dai5noro@gmail.com

登録してね



2025年

1

月号

NO.166

# 泉

-IZUMI-

— 目次 —

表紙「ダッピィ・ニューイヤァ」

百折不撓「存在の満足①」

感応道交「報恩講に寄せて」

ただ念仏

鈴の鳴る道

掲示板・お知らせコーナー

＊付録 ハザード便り

(連載「それでも人生には意味がある」はお休みいたします。)

野呂大悟

野呂美道

一樂 真

野呂美道

星野富弘



辰から巳 バトン渡して 年明くる

野呂 博子

この写真の人物は「アシュリー・ヘギ」さん。一九九一年にカナダで生まれ、二〇〇九年二才でお亡くなりになりました。



All About Ashley  
出版社：扶桑社

全身の老化が異常な

速さで進行する「プロジェリア」という病気でした。病気で周りの子どもよりも見た目や体もまったく異なり、周りの人々はアシュリーさんを見ると「可愛そう」など同情の目や、時には偏見・差別的な視線も感じる事があったそうです。しかし、アシュリーさんは、どんな状況であったとしても、病氣と向き合う前向きな姿勢で「人の前では悲しい顔をしたくないわ。私が笑顔でいると、みんなハッピーになるでしょ。」と常に笑顔や元気を絶やさない方であったといえます。

そして、「生まれ変わるなら、もう一度今の私が良いわ。私は、私という人間であることが幸せ」という言葉を残しています。プロジェリア症候群は早期に死に至るといわれているため、常にアシュリーさんの「生」には「死」が覆いかぶさっていた。そのような印象を受けてしまうのですが、それでも「もう一度私に生まれ変わりたい」というアシュリーさんの言葉にはとても驚かされます。これを、報恩講にて法話をしてくださった北村雄平師は「存在の満足」という言葉で表されました。

私たちは、常に自分の都合の良い状態を保ちた

いという思いに囚われています。もし偶然に上手くいった場合、それは「状況の満足」に過ぎません。この「状況の満足」は、周囲の状況や自身の都合によって変わりやすく、すぐに「不満足」に転じる可変的なものです。一方で、「存在の満足」は、どのような状況に置かれても揺るがない不変的なものだと思います。

北村師の話聞いて、私はダウン症の方々に関するエピソードを思い出しました。

二〇一五年に厚生労働省がダウン症の方々を対象に「あなたは幸せですか？」という大規模なアンケート（二歳以上の852人）を実施したところ、98%の方が「はい」または「ほとんどそう」と答えたそうです。

ダウン症は生まれつき染色体異常が原因で、疾患を併発することが多い障がいです。一昔前は寿命が20歳前後とされていましたが、医学の進歩によって延びつつあります。それでも、多くの方々が「毎日幸せだ」と感じながら人生を送られている事実、深い喜びを覚えました。私自身、日々の仕事でダウン症の方々と関わる機会がありますが、彼らを持つ周囲を明るくするエネルギーに感動しています。

一方で、出生前診断の問題も考えさせられます。胎児の段階でダウン症と診断されると、90%以上の方が人工妊娠中絶を選択するという現実があります。このことは、私たちが「いのち」とどう向き合うべきかを問いかけているのではないのでしょうか。

（続く）



◆今年の報恩講も、写真にあるように、盛大に行われた。年番さんたちも、参詣者も、心を一つにした報恩講だった。北村師の一つのお話を紹介する。◆  
 「空を飛ぶ一羽の白い鳥の命を巡って、矢を射た兄のものか、介抱した弟のものかで、言い争いになった。それを収めた長老は言った。『命はそれを愛し、育むもののためにある。』と。◆この話に、痛く感動した人の話をしよう。同じ法話を、私の弟が住職をしているお寺で北村師がしたところ、百二才のお婆ちゃんを亡くしたばかりの一家が聴聞していた。奥さんはあまりの感動に打ち震え、号泣したという。ひ孫もこの話を担任にして、温かい言葉をもたらした。◆安泉寺では、淡々と過ぎていったこの寓話がなぜ、弟の寺でお母さんを号泣させたのか。その家族はひいお婆ちゃんを中心に、仏法に篤く、家族を亡くした悲しみから、お寺で聞いたこのお話が、心の底まで浸透したんだと私は思う。北村師の談話を載せる。◆「仏法に出会うと、人は金色に輝く。学校の先生も、嬉々と語る生徒に驚いただろう。説教師は『師』ではなく『使』である。おおもとの『仏教』がスゴイんだ。感謝されると嬉しいが勘違いしてはならないと自分に言い聞かせている。◆とはいえ、法話で人が元気を取り戻していく姿を見るのはたまらない快感である。これは、かつて私が僧侶を目指すに至った原体験でもある。『抜苦与楽』という仏教の大事業に参加させてもらっていると思うと誇らしくもある。◆お母さんの言葉「二日間聞いたお話は絶対に忘れません。なんだかお婆

2024年報恩講の様子 12月7日・8日 安泉寺



北村雄平師（左下）  
 手作りのお齋（中央下）  
 準備してくれた近所の高校生（右下）

ちゃんが目の前に居るんじゃないかと思えた二日間になりました。来年絶対に行きます！！来年まで待てないので北村さんのお寺さんまでお参りに行きたいね！って、娘と話していました。娘も心に響いたのか学校で先生に話したようです。顔つきが違ったらしく学校から連絡が来ました。◆北村師の返事「お婆ちゃんが大切にしていたものを大切にすることであり、お婆ちゃんを聞くことは遺志を受け継ぐことであり、お婆ちゃんにお願いに伝えていくこと。お婆ちゃんが大切にしてくれたものをあなたも、娘さんも、同じように受け取ることができたよね。亡き人と共にする大切な大切なことから。」◆求めるものと、教えが一体となり、大きなエネルギーが生じ、光り輝く状態。それを感応道交というのです。

## 「ただ念仏」

ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし

大谷大学学長 一樂 真(まこと)

◆私の話になりますが、大谷大学に入学してからというもの、どの授業を聴いても「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」(歎異抄)という言葉が出てくるのです。どの先生も、要はこれだと言われる。言われれば言われるほど、何でそれが大事なのが全然受け止められなかったのです。

◆もっと言うと、私は疑い深い人間ですから、上から押さえつけられているような気がしたわけです。とにかく念仏しろとか、とにかく阿弥陀仏に助けられなさいというように無理やり信じなさいと言われるような気がしていました。

◆先生方はもちろんそう仰っていたわけではありません。自分が勝手にそう思い込んでいたわけですが、「何で念仏なのだ」「阿弥陀仏を信じるとはどういうことだ」「阿弥陀仏によつて助けられるとは何だ」そういう疑問ばかりでした。この言葉を聞いただけで反発を覚えるような時期もありました。

◆しかし、そんな私がだんだん時間とともにですが、お育てにあずかってきたわけです。今は決して上から、念仏しろとか、とにかく阿弥陀仏に助けられよというように押さえ付けている言葉としては受け止めていません。

◆これは親鸞聖人の頷かれた言葉なのです。もちろん法然上人の呼びかけの言葉ですが、そこにはつき

りと見えたことがある。「ああ、そうだったのか」と確信したことがある、そういうお言葉だと思います。それを私なりの言葉で申し上げますと、「あなたは阿弥陀仏に助けられないといけない人間なのですよ」ということです。もう少し言えば、「自分でも今日から気を付けたら、人を傷つけないように生きられるかと思っているのですか。今日から妬まないうにと思つたら、妬まらずに腹を立てずに生きていくのですか。そんなに立派ですか」という話です。要するに、「あなたは何ものだ」という話です。それを問われた言葉だと思えます。

◆「あなたは阿弥陀仏に助けられないといけない人間ですよ」それを逆から言えば、「あなたは自分自分のことを助けられるような人間だと思っているのですか。」これが知らされたわけです。

◆決して、阿弥陀仏をとにかく信じなさいよという話ではなくて、あなたはどうすれば救われるのですか。どうやったら、「生死出べき道、いいものと悪いものを立てて、こっちが好きだ、こっちが嫌い」という在り方から離れていくことができるのですか。」

◆心がけ次第でそんなことができるはずはないのです。年を重ねたからと言って腹が立たないようにするわけではない。好きか嫌いかで人にレッテルを貼っていくこともしてしまふ。そこです。だから、阿弥陀仏に助けられないといけない。こういうお言葉が、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」なのです。

◆一楽先生は私にとって「よくわかる」話をして下さる唯一の方だと思っています。真宗のお話は、専門用語が出てくると、もうさっぱりお手上げです。講師の先生方は自信満々でお話をされますが、聞いている私はなぜ先生方がそこまで感動を持って話されるのか、さっぱり分からないことが多いのです。

◆自分分かったような顔をして、最後はみんなで唱える「南無阿弥陀仏」のお念仏で終わる法座がほとんどでした。でも、本当のところは何も分かっていませんでした。◆一楽先生のお話は、難しいところが一つもありません。それどころか、私の心を見透かされ、えぐられたように思います。いちいち頷くことばかりです。◆親鸞聖人も私たちと同じ気持ちだったことでしょう。こんな人間が悟りを得られるはずもない。私たちは例外なく、毎日の生活に追われ、自分を見つめることもせず、あれは良い、これはダメだというように、常に物事をよし悪しで判断し、自分に都合の良いことばかりを選び取って生きています。◆そういう私たちが救われる（人生に意味があると確信する）はずありません。自分の浅はかな姿のまま、すべてを大いなる力にお任せするしかないと思いついた時に、お念仏が出てくるのでしょうか。◆自分で唱えるお念仏とお思いでしょうが、実はそうでもないかも知れません。ひょっとしたら、これは阿弥陀仏が私の体の中に入り込んで、私の口を動かしてくれているのかも知れませぬ。お任せするということはそういうことです。私

が生きている瞬間瞬間に、私を私足らしめている働きを仏というのではないのでしょうか。◆日々の生活を送っていく中で、「自己中心の生き方を離れ（離れられなくてもいいから）、大いなる力に任せよ、そこに生きながら得られる安息があるのだよ」と呼びかけ続けていてくださるお方の呼び名が「南無阿弥陀仏」だと思っています。そんな風に了解したら、念仏が強制ではないことに少しは思いが向くのではないのかな？



大谷大学学長 一楽 真 氏（写真は大谷大学HPより）  
一楽 真（いちらくまこと、1957年 - ）は、真宗大谷派の僧侶、真宗学を専攻する仏教学者である。石川県生まれ。2018年現在、大谷大学真宗学科教授。博士（文学）。真宗大谷派小松教区第二組宗圓寺住職。真宗大谷派擬講。所属学会は、日本仏教学会、日本印度学仏教学会、国際真宗学会、真宗連合学会、日本宗教学会。大谷大学真宗学会『親鸞教學』発行人。真宗大谷派主催「新宿親鸞講座」講師。  
2021年12月16日大谷大学第29代学長に就任



今回は首から下が麻痺した画家星野富弘さんの文章を紹介する。私は逆境を人生の糧とする彼の生き方に深い感動を持った。(老僧)

星野富弘さんの『花の詩集画』より…

〜鈴の鳴る道〜

車椅子に乗るようになってから12年が過ぎた。

その間、道のでこぼこが良いと思ったことは一度もない。

ほんとうは曲がりくねった草の生えた土の道の方が好きなのだけれど、

脳味噌までひっくりかえるような振動には、お手あげて

ある。

だいいち、力の弱い私の電動車椅子では止まってしま

う。

車椅子に乗ってみて、初めて気がついたのだが

舗装道路でも、いたるところに段差があり、平らだと思

つていた所でも、

横切るのがおっかないくらい傾いていることがある。

ところが、この間から、そういった道のでこぼこを通る時

に、ひとつの楽しみが出てきた。

ある人から小さな鈴をもらい、私はそれを車椅子にぶ

ら下げた。

手で振って音をだすことができなから、せめて、いつも

見える所にぶらさげて、

銀色の美しい鈴が揺れるのを、見ているだけでも良いと

思ったからである。

道路を、走っていたら、例のごとく小さなでこぼこがあり

私は電動車椅子のレバーを慎重に動かしながらそこを、通り抜けようとした。

その時、車椅子につけた鈴が「チリン」と鳴ったのである。

心にしみるような澄んだ音色だった。

「いい音だなあ」

私はもう一度その音が聞きたくて、引き返してでこぼこの上に乗ってみた。

「チリーン」「チリーン」

小さい音だったけれど、ほんとうに良い音だった。

その日から道のでこぼこを通るのが楽しみとなったのである。

長い間、私は道のでこぼこや小石を、なるべく避けて通ってきた。

そしていつの間にか、道にそういったものがあると思っただけで、

暗い気持ちを持つようになっていた。

しかし小さな鈴が「チリーン」と鳴る、たったそれだけのことが

私の気持ちをと、とても和やかにしてくるようになったのである。

鈴の音を聞きながら、私は思った。

人も皆、この鈴のようなものを、心の中に授かっている

のではないだろうか。

その鈴は整えられた平らな道を歩いていたのでは鳴ることがなく、

人生のでこぼこ道にさしかかった時揺れて鳴る鈴である。

美しく鳴らしつづける人もいるだろうし、閉ざした心の奥に

押さえ込んでしまっている人もいるだろう。

私の心の中にも、小さな鈴があると思う。その鈴が、澄んだ音色で歌い、

キラキラと輝くような毎日が送れたらと思う。

私の行く先にあるみちなのでこぼこを、なるべく迂回せずに進もうと思う。

〈花の詩画集〉鈴の鳴る道「偕成社」より

## 老僧のコメント

◆今年亡くなった、星野富弘さん。私は教員時代、生徒に好んで彼を紹介した。当時、樫山文江という素晴らしい俳優（朝ドラ「おはなはん」で有名）が、星野さんと共に語り合う場面を今も思い出す。

◆彼の奥さんは、彼が障害を得てから結婚した。最もやりがいのある人生を送りたいと、奥さんはあえて困難な人生に身を投じた人だ。◆口で絵を描くなどと言葉では簡単に言うが、画用紙に一本の線を描くだけでもどれほどの労苦があった事だろう。首から下が全く麻痺した体を生涯支え続けた奥さん。心からご苦労様と言いたい。夫婦はとても意味のある人生を歩んできたという実感を私は強く持った。



上の写真  
星野富弘氏（芦北町立星野富弘美術館HPより）  
下の写真  
1982年口に絵筆を加えて制作する星野さん  
（gunma上毛新聞より転載）

星野富弘さんプロフィール（芦北町立星野富弘美術館より転載）  
1946年、群馬県勢多郡東村（現みどり市東町）に生まれる。群馬大学教育学部卒業後、中学校の体育教諭になるが、クラブ活動（器械体操）の指導中、模範演技で空中回転したとき誤って頭部から転落。頸髄を損傷。首から下の自由を失う。入院中、口に筆をくわえて文や絵をかきはじめる。前橋で最初の作品展を開く。退院後、雑誌や新聞に詩画作品やエッセイの連載を始め。1982年、高崎で初の「花の詩画展」を開催。以降、全国各地、また海外でも開催される。現在も続いている。2009年群馬県勢多郡東村（現みどり市東町）に富弘美術館開設。現在も詩画やエッセイの創作活動を継続中。著書多数。



スマホ  
はコチラ

安泉寺 愛西市

TEL/FAX 0567 (28) 0001

住職  
野呂大悟

東岳山  
真宗大谷派  
安泉寺



このページの  
お問合せ先は

1月の予定

修正会・餅つき	一日 (水)
別院募金	十二日 (日)
文芸クラブ例会	十六日 (木)
写真クラブ例会	十八日 (土)

### 今月の掲示板

意思が濁れば  
意地になり  
口が濁れば  
愚痴になり  
徳が濁れば  
毒になる

◆出典は分かりませんが、見事な言い換えです。心が濁るのはやむを得ないことです。鏡のように澄んだ心で自分自身を写し出すことはできるのでしょうか？

いずみのほitori (老僧)

◎教え子たちが私の全快祝いをしたいと、安泉寺にやってきました。自分たちで食材を持ち寄り、鍋を囲んで飲食を楽しみました。その際、祝いの花箋と、軽い包み箱をもらいました。箱を開けると「今治タオル」が出てきました。「今、治った」という語呂合わせで縁起が良い品物だそうです。なるほど、面白いダジャレで、感心しました。

◎恒例の自治基本条例の出前講座で、愛西市のすべての中学二年生に、条例のを知ってもらう授業をしました。市民、市役所の職員併せて五人が授業を行いました。◆難しい条例を分かりやすく、大きなイラストや掛け合いコント、クイズなどで会場を沸かせることに努力しました。◆なりふり構わず、目いっぱい生徒にアプローチして、授業後、会場を片付けている時、二人の女子生徒がやってきて私に言いました。「じいじの孫になりたい！」

◎郵便代大幅値上げの折、昨年の年賀状で、今年の年賀状はメールアドレスをいただいた方のみに出しますとお約束しました。残念ながら、アドレスをいただいた方は一人しかいませんでした。この寺報の表紙の言葉をもって、年賀のご挨拶にかえさせていただきます。

◎安泉寺にかかわる近況は、寺報を通して皆様に毎月報告をいたします。また、皆様方のお返事や感想はお電話をいただくこともありますし、直接お話をいただくこともあります。そのどれもが来月号を発行するための大切なエネルギーになっていきます。心より感謝いたします。

お知らせ  
コーナー